《翻　訳》

ポルトガル人宣教師が見た 16 世紀東南アフリカの風俗と野生

——ジョアン・ドス・サントス著『エティオピア・オリエンタール』(ソファーラ篇)より——

Uns episódios relativos a alguns costumes indígenas e animais selvagens no Sudeste Africano Quinhentista registados na *Ethiopia Oriental* da autoria de frei dominicano João dos Santos.

日埜 博司

キーワード ジョアン・ドス・サントス, 『エティオピア・オリエンタール』, カフル人の婚姻習俗, “異形”, エンポーフィア, ライオンとハイエナ

解題

ポルトガル人ドミニコ会士ジョアン・ドス・サントス(Frei João dos Santos, O.P.)が執筆し 1609 年にエーヴォラで刊行された『エティオピア・オリエンタール』(*Ethiopia Oriental*)という大著がある。サントスは 16 世紀末から 17 世紀初めにかけ永年にわたり, 東南アフリカの各地と, ゴアを中心とするエスタード・ダ・インディア——東洋におけるポルトガル勢力圏——でカトリックの布教に従事した。『エティオピア・オリエンタール』には主として, 16 世紀東アフリカ——ソファーラ, マナモターパ(モノモターパ), モサンビーク, アベシーン(エティオピア), メリンデなど——の, その歴史, 人文, 地理, 民俗, 自然, 動物, 植物, 鉱物, 等々に関するサントスの該博な知見が遺憾なく披瀝されている。

今日モサンビーク共和国の一行政区となっているソファーラ(中心都市はベイラ)

に関連する一連の記事の中からその先住民の習俗や野生の営みなどにふれた 4 つの章を和訳してみる。

第 16 章にサントスは,「乳房をふくませて子を養う男」など, みずからが東南アフリカや母国ポルトガルで見聞したもろもろの monstruosidades に言及している。男性が乳房から乳汁を出して子を養えるかどうかには疑義の余地があるが, 男性の乳房の女性化というのは, これは決して荒唐無稽のフィクションではない。銀座みゆき通り美容外科のホームページによると, これは「女性化乳房」と呼ばれるもので, ホルモン・代謝異常, もしくは薬物の副作用によって生ずる。女性のように乳腺自体が発達したバストを「真性女性化乳房」と呼び, 単に太って脂肪がついた結果, 膨らんでしまった胸を「偽性女性化乳房」という(同ホームページには,「真性女性化乳房」を治療した男性の手術前・手術後の写真も掲載されている)。monstruosidade は monstro(怪物)の派生語であるから, おそらくはネガティブな語感の伴う語彙なのであろうが, サントスの記事に現われるさまざまな男性の乳房は, 前者の様態を示すものであると理解できる。したがってこれは, 奇病と呼ぶような疾患ではない。

第 20 章で興味深いのは, その最終第 5 パラグラフに現われる, エンポーフィアと呼ぶ一種の言葉遊びというか, 言葉による愉快な駆け引きの習俗に関するくだりであろう。

エンポーフィアという語彙は用いられていないが, ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『サント・アルベルト号難船記』(リスボア, 1597 年刊)に見える次の記事(1595 年 6 月 4 日のくだり)は, 東南アフリカを放浪したポルトガル人の一行が, サントスより前に, エンポーフィアの習俗を知っていたのではないか, という推測を可能にする。

アンコセの支配する土地を一緒に前進し，野営の準備を終えた頃，アンコセのもとへ大きなヒョウタンに入れた酒がもたらされた。この酒，ゴキブリがうようよと浮かんでいるしろものであって，トウモロコシから作ったという。酒はポンベと呼ばれる。これをアンコセはヌーノ・ヴェーリョばかりか，ヌーノ・ヴェーリョと一緒にいたポルトガル人にも，飲んでみなさい，としきりに勧めた。さてわが同胞であるが，誰もがアンコセの御機嫌を損ねぬよう，失礼に当たることのないよう，おいしそうにこの酒を飲んだ。[1]（下線は引用者による）

ポルトガル語世界の最終的典拠というべきモライスの辞書を参照しても，このempófiaという単語については，«Pretexto para tomar conta do que é alheio»[2]（他人のものを奪うための口実）という直截的な語義がさらりと記されているだけである。エンポーフィアがどのような振舞いであるか，を伝えるサントスの記述（第1部第1巻第6章）はすでに和訳した[3]。そこに見えるエンポーフィアのやり口を見ると，上記の平板な定義を超える，愛嬌を含んだ洗練性を感じることができる。要約すると，次の

[1] 日埜博司「ジョアン・バプティスタ・ラヴァーニャ『ナオ船サント・アルベルト号難船記』（1597年）——ヴィラ・ヴィソーザ，ブラガンサ家所蔵初版本からの全和訳およびテキスト校訂」『流通経済大学論集』通巻158号，2008年，45～46頁。

[2] Antonio de Morais Silva, *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*, 10ª edição, vol, IV, [Lisboa], Editorial Confluência, [1952].

[3] 日埜博司「〈神聖なる王を殺すこと〉に関しフレーザー『金枝篇』が行なう考察の一典拠——ジョアン・ドス・サントス著『エティオピア・オリエンタール』より」『流通経済大学流通情報学部紀要』通巻26号，2009年，72～73頁。

ようなエピソードだ。

まず，キテーヴェ〔東南アフリカ先住民の部族長を表わす普通名詞〕は，迎える客がポルトガル人であれ他のなんぴとであれ，自邸に常備する酒――ポンベというトウモロコシ酒――でこれを歓待する。ヌーノ・ヴェーリョの一行がゴキブリの浮かんだポンベを飲まされたように，キテーヴェが飲ませようというポンベも，まず，ポルトガル人の口には合わない。ところが，客がこの酒を大いに喜ぶ素振りを見せて飲まぬなら，すかさず，キテーヴェは客へ，いろいろ難癖じみた言葉のゲームを仕掛ける。いわく，「飲むのがそれほどおいやか。それはわが酒が御身のお気に召さぬからか。それとも余が酒に毒でも盛ったとお考えのゆえか。御身はそこまでして余を悪い王に仕立てようとするか」。キテーヴェに拗ねられたら，キテーヴェが満足する程度の財を貢ぐまで，客は暇乞いすることも許されない……

第20章に見えるエンポーフィア――ここでは「言葉遊び」と訳す――のエピソードからは，モライスの辞書の定義を明らかに超える豊かな意味の広がりを確認することができるであろう。16 世紀末の東南アフリカに，これほど精妙にして優雅な言語藝術の華が開いていたとは驚くばかりではないか。

第22章は，5つのパラグラフに分かれる。そのうち第3および第4パラグラフに現われる tigre なる動物であるが，これはたぶんトラではなく，ハイエナにほかなるまい。最近NHKのネイチュア・ドキュメンタリー番組で，第4パラグラフに描かれるのと基本的にはまったく変わらぬハイエナの生態が紹介されていた。

――雌ライオンがチームワークで狩ったヌーなどの獲物。これを嗅ぎつけ，どこからともなく現われる大勢のブチハイエナ。なんと雌ライオンを追っ払い，獲物を横取りする。集団ならブチハイエナの実力は，むしろ雌ライオン以上なのであるが，

そんなとき存在価値を発揮するのが，群れのリーダーたる雄ライオンだ。獲物に喰らいついているブチハイエナも，立派なタテガミを持った雄ライオンが——たった一頭でも！——現われると，たちまち逃げ散ってしまう。雄ライオンは自力で狩りができない。普段は雌（要するに多くの妻）に喰わせてもらっているわけだが，群れの用心棒の役割はきちんと果たしていることになる。

イベリア半島にはハイエナが棲息しないから，ハイエナをtigreと表現したと言えばそれまでである。ハイエナとトラとでは，あまりに違いが大きすぎるように思われるが，こうした便宜的な言い替えなら，ルイス・フロイスら16世紀に来日した南蛮人宣教師の記述にも，類例が認められる。要するにサントスは，トラとは明らかに異なる動物であることを熟知したうえでtigreという語彙を用いた可能性が大きい。

サントスは，カフル人が「トラに養われる子」に対して懐く嫌悪感にも言及している。引き続き，この母子がハイエナのそれであろうという仮定に立って話を進めるが，アフリカの多くの社会では，ハイエナは「まがまがしい前兆を行なうもの，あるいは不可視の姿となって夜に他人の内臓を喰う邪術師が姿を変えたもの，と考えられている」という。こうした負のイメージは，足が短く，均整を欠いた姿態，他の肉食獣の打ち捨てた死体に群がり，強い顎で骨まで噛み砕く，夜行性……といった彼らの習性なり生態なりによって形成されたもの，とされる[4]。

翻訳は，下記の校訂本（CNCDP版）をテキストとして行なう。

Fr. João dos Santos, *Etiópia Oriental e Vária História de Cousas Notáveis do Oriente*, Introdução de Manuel Lobato, Notas de Manuel Lobato & Eduardo

[4]『日本大百科全書 18』小学館，1987年。「ハイエナ」の項参照。

Medeiros, Fixação do texto por Maria do Carmo Guerreiro Vieira (coord.), Célia Nunes Carvalho & Maria Amélia Rodrigues Coelho, Lisboa, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1999, 759ps.

当初は，CNCDP 版に附された有益な脚注もすべて日本語へ直そうかと考えたが（特に第 15 章に見えるカフル人の婚姻習俗に関しては極めて詳細な注が施されている），この作業には学際的な専門的助言と指導とが必須であるに鑑み，今回は本文のみを訳して材料を提供するにとどめる。その際 CNCDP 版が設けたパラグラフに忠実に従う。そのパラグラフごとにまずポルトガル語原文を，引き続き訳文を，それぞれ掲げる。

翻訳

CAPÍTULO XV（PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO）

Dos casamentos, partos e mortalhas destes cafres.

第 15 章（第 1 部第 1 巻）　これらカフル人たちの結婚や出産，および埋葬について

Os cafres destas terras compram as mulheres com que casam a seus pais ou mães, e por elas lhes dão vacas, panos, contas, ou enxadas, cada um segundo sua possibilidade, e segundo a mulher é. Pola qual razão os cafres que têm muitas

filhas pera casar, são ricos, e vivem mui contentes com elas, porque têm muito que vender. Se algum cafre vive descontente de sua mulher pode-a tornar a quem lha vendeu, mas fica perdendo todo o preço que deu por ela quando a comprou, e o pai ou a mãe é obrigado a tomar a filha enjeitada, e depois de a ter em seu poder fica descasada do marido que a repudiou, e o pai a pode tornar a vender, e casar com outro marido. A mulher não se pode apartar do marido, nem deixá-lo, nem enjeitá-lo, porque em certo modo fica como sua cativa, que lhe custou seu dinheiro. Quando estes cafres casam não têm mais cerimónias, que concertarem-se as partes, e o dia do casamento fazerem grandes bailos, festas, e jogos, em que se acham presentes quantos moradores há naquele lugar onde se faz o casamento; e cada um dos convidados traz sua oferta de milho, ou farinha, inhames, grãos, feijões, e o mais que cada um pode, ou q.uer trazer, e tudo isto dão aos noivos pera ajuda dos gastos daquele dia, e a mor parte destas ofertas é gasta nestas bodas em comer, e beber. Todo o cafre que quiser ter duas mulheres, o poder fazer, se tem posse pera isso, mas são poucos os que podem, e assim não têm mais de uma, salvo os grandes, e senhores do reino, porque esses têm muitas, entre as quais uma só é mulher grande, principal, e mais estimada, ficando as outras como mancebas.

この地方のカフル人たちは，結婚相手となる妻をその両親から買う。そしてその妻と引き換えに，妻の両親には雌ウシや反物や数珠や斧を与える。ひとりひとりがその身上に応じて，そしてもらう妻〔の価値〕に応じて，そうする。それゆえ，結婚させうる娘をたくさん持つカフル人こそが裕福であり，彼らは，多くの娘を抱えて満足至極に暮らしている。というのは，売りとばしうる多く〔の財産〕を持っているから

だ。もしカフル人が妻との生活に満足しなくなれば，この妻を元の売り手へ戻すことができる。しかし，妻を買い取ったとき妻と引き換えに差し出した対価は，すべて失う破目に陥る。〔妻を売った〕父もしくは母は，返されてきた娘を受け入れる義務を負う。父もしくは母が娘をみずからの支配下に置いたその後，娘と，娘を離縁した夫との結婚が初めて解消する。この娘を父は，またもや売り払ったり他の男と結婚させたりできる。妻から夫に対し離縁を申し出ることはできないし，夫を放置したり追い払ったりもできない。妻の地位は，ある意味，夫の奴隷のようなものである，妻には元手がかかったから，というのが夫の言い分である。これらカフル人が結婚するときに行なう儀式らしい儀式は，双方が取り決めを交わしあい，結婚の当日，盛大な踊りやお祭り騒ぎ，さらには遊戯を行なうこと，これだけである。その場には，婚儀の行なわれるその土地にいる住人がもれなく顔を出す。招待を受けた人々は，ひとりひとり贈りものを持参する。贈りものとは，トウモロコシや小麦粉，ヤマイモや種々の穀物や豆類，そしておのおのが持参しうる，あるいは持参したいと望むその他もろもろである。招待を受けた人々は，以上すべてを花婿へ差し出す。その日の消費を助けるためである。こうした贈りものの大部分は，当日の婚宴で食べたり飲んだりして費やされる。ふたりの妻を持ちたいと思うなら，カフル人は誰しもそうすることができる。ただしそうするための資力があればだ。そのようなことがやれる者はごく僅かである。というわけで，通常のカフル人はふたり以上の妻を持たない。ただし国の大身貴顕といった連中は例外であり，彼らは多くの妻を持つことができる。多くの妻の中でただひとりが〈大きな〉妻，主要なる妻，そして最も尊重される妻である。その他はと言えば，それは情婦か妾のようなものである。

Algũas cafras há nestas terras tão agrestes, como as feras, e silvestres animais, o que mostram claramente em seus partos, porque muitas delas quando lhe dão as dores de parir vão-se aos matos, e neles andam passeando de ũa parte pera outra, recebendo o cheiro do mato silvestre, com que parem mais depressa, como se foram cabras, e depois que parem se vão às lagoas, ou rio, e nele se lavam, e os filhos que pariram, e dali se tornam pera suas casas com eles nos braços, sem se apertarem, porque não têm com que o possam fazer, nem costumam, nem menos se deitam em cama, porque a não têm pera si, nem pera os tenros filhos, mais que ũa esteira, ou ũa pouca de palha, onde quando muito se deitam o dia que pariram, salvo se ficam doentes, como muitas vezes lhe acontece.

このいとも草深い土地には，まるで野獣か森林に住む獣同然のカフル女がいる。そのことがはっきりと示されるのは出産に際してである。というのは，彼女らの多くは陣痛がやってくると，ジャングルへ出かけてゆき，その中をあちこち歩き廻る。彼女らは奥深いジャングルの香りを体に受け止め，そうすることによって出産をより速やかにする。そのありさまは，まるで雌ヤギのようだ。出産を終えると，湖もしくは川へ出向き，そこでみずからの体と，産み落とした子の体を清める。そこから自分の家へ戻るが，そのときわが子を両の腕に抱いている。しかもわが子を締めつけることなく。締めつけることなく，というのは，それを可能ならしめるものを彼女らは持たないし，持つ習慣もないからだ。また寝床に横たわることさえない。寝床など自分のためはおろか，いたいけなわが子のためにさえ持っていない。持っているのは一枚の筵か，僅かの藁かであり，病気になったとき——これはたいそうよくあることだが——は別として，そこに横たわるのは，せいぜい分娩を終えた当日にすぎ

ない。

Quando algum cafre morre, não somente o choram seus parentes e amigos, mas também os moradores do lugar, ou aldeia em que morava, e o pranto dura todo aquele dia em que morreu, e mesmo dia o levam a enterrar em cima da esteira, ou catre em que morreu; e se o defunto tinha algum pano pera sua mortalha, vai amortalhado nele, e se não vai nu como andava sendo vivo. Fazem-lhe a cova dentro no mato, onde o metem quasi assentado, e junto dele põem ũa panela de água, e um pouco de milho, o qual dizem que é pera o defunto comer, e beber naquele caminho que faz pera a outra vida, e sem mais cerimónias o cobrem de terra, e sobre a cova lhe põem a esteira, ou o catre em que o levaram a enterrar, onde se gastam, e consomem com o tempo, sem mais se servirem deles, ainda que sejam novos, porque têm grande agouro em tocar na esteira, ou catre, em que alguém morre, tendo pera si que daquele tacto se lhe pode pegar a morte, ou algum mal.

誰であれカフル人が死ぬと，親戚や友人がその死を悼んで泣くばかりではなく，死んだ者が生前住んでいた場所，もしくは部落の住人もまた，そのようにする。悲しみは，死の当日，ずっと継続する。同日，人々は死者がそこで亡くなった筵，もしくは寝台の上に遺骸を横たえ，埋葬へ出す。もし死者がみずからの遺骸を包むための布を有しているなら，その布にくるみ，そうでないなら，生前元気でいたときのように，裸のまま葬る。死人のためジャングルに穴を掘り，その穴の中に，死骸をほとんど座らせるような格好で据える。死骸のかたわらには，水を入れた鍋をひ

とつ，それにトウモロコシを少量置く。皆が言うところによると，その水なりトウモロコシなりは，死者があの世へ向かう道行きのさなか，食べたり飲んだりするためのものだそうだ。それ以外の儀式は何もなく，死骸は土で覆う。そしてその穴の上から筵を掛けるか，寝台を置くかする。それは，葬ろうとする死者を運ぶに用いたものだ。死骸はそこで，時とともに，朽ち果てる。そして筵なり寝台なりは，たとえそれらが新品であっても，それ以上使おうとはしない。なぜなら彼らは，誰かがそこで亡くなった筵もしくは寝台と接触することに強い迷信を持っているからだ。そうした接触から，死やら何らかの災厄やらが感染するかもしれぬ，と思い込んでいるのだ。

Os parentes, e amigos choram o defunto oito dias, pola manhã, ao meio-dia, e ao sol-posto, uma hora de cada vez, pouco mais ou menos; o qual pranto fazem bailando, e cantando em voz alta muitas lamentações, e prosas lastimosas feitas a seu modo, todos juntos em pé postos em roda, e de quando em quando entra um dos circunstantes no meio da roda, e dá ũa volta, ou duas, e logo se torna a seu lugar; e depois que acabam este pranto, assentam-se todos em roda, e comem, e bebem pola alma do defunto que choraram. Isto concluído, vai-se cada um pera sua casa. Pera este convite contribuem os parentes mais chegados do defunto.

死者のため親戚なり友人なりは 8 日間を泣いて過ごす。朝方と正午，そして夕暮れに，それぞれ大体 1 時間ずつ。その悲しみを表わすのに，彼らは舞踏したり，高い声で悲哀の歌のかずかずや，彼らの様式で作られた哀愁に満ちた散文詩を謳ったりする。全員が揃って円形に並び立ち，ときおりその連中のひとりが円形の真ん中に入る。そして 1 度か 2 度，でんぐり返りをやって，ただちにみずからの場

へ戻る。この悲しみの儀式を終えた後，全員，車座に腰をおろし，弔意の涙を捧げたその死者の魂のため，食べかつ飲む。以上が済むと，ひとりひとりの家へ帰ってゆく。この招宴には，死者にゆかりが深ければ深いほど，大きな寄付を行なう。

Todos estes cafres são desumanos, e cruéis uns pera os outros. Se algum deles adoece, e não tem mulher, ou parentes, e amigos, que lhe queiram muito, e curem dele, ordinariamente morre ao desemparo, porque nenhum outro cafre há que se doa dele, nem lhe dê cousa alguma de comer, ainda que o veja estar perecendo, e morrendo de fome, e necessidade; da qual doença comummente morrem todos, por serem mui pobres, e miseráveis, e avaros de qualquer cousa de comer, ou beber que tenham; e quando muito fazem a estes desemparados, é levá-los algum seu amigo ao mato, e deitá-los ao pé de uma árvore, ou mouta, pondo junto deles ũa panela de água, e um pouco de milho, pera que comam, e bebam, se puderem, e ali os deixam até que acabam de morrer, sem mais terem cuidado deles; e ainda que algum cafre passe junto deles, e os veja lamentar, ou gemer, não se dói deles pera os remediar. Alguns cafres há que têm esta desumanidade tanto por natureza, que em si mesmos executam sua crueldade, porque em se sentindo mal, e parecendo-lhe que já estão no último da vida, mandam-se levar ao mato, e postos ao pé de uma mouta, se deixam morrer como brutos animais.

このカフル人というのは，相互に不人情であり，かつ冷酷である。誰か病気になり，その者をいつくしんでやったり，看護の労をとってやったりする妻や親戚，さら

には友人がいなければ，通常その者は，ほったらかしにされて死んでしまう。というのは，彼のことを悼んだり食を与えたりするカフル人など，ほかには誰もいないからだ。たとえその者が瀕死であると目撃されても，飢えや窮迫で死の一歩手前であるとわかっても，事情は同じだ。だから，病気に罹ると，通常は皆，そのまま死ぬしかない。誰しもたいそう貧しく，悲惨な生活を送っているし，手持ちの食べものや飲みものに対し，彼らは吝嗇この上ないからだ。こうしてほったらかしにされた連中のため彼らがしてやる精一杯のこと，それは次のとおりだ。友人がこれをジャングルへ運び，これを木もしくは枯れ木のたもとに放置する。そしてそのかたわらに，水を入れた鍋 1 個，それからトウモロコシを少量置く。可能であれば，連中が食べたり飲んだりできるように，との配慮だ。連中は，その場で息絶えるまで放置され，それ以上の思いやりはまったくない。誰かカフル人が連中のかたわらを通りかかっても，また，彼らが嘆きの声を上げたり呻いたりするのを目撃しても，これを癒してやろうと同情したりはしない。一部にこんなカフル人さえいる。彼らはそうした無慈悲を当然至極と見なしているため，ほかならぬ自分自身に対して残虐性を行使するのだ。すなわち，病勢が進み，もはや生の終末にさしかかったと自覚したら，周囲に命じ，みずからをジャングルへ運ばせ，枯れ木のたもとに置き捨ててもらう。そうして野獣の如く，自分自身を死へ至らしめる。

♣

Capítulo XVI（Primeira Parte, Livro Primeiro）

De cafres alvos, e homens que criaram filhos a seus peitos, e de outras

monstruosidades.

第 16 章（第 1 部第 1 巻）　膚の白いカフル人や，乳房をふくませて子を養う男，そしてその他もろもろの異形について

Algũas cafras houve nos Reinos de Mocoranga, que pariram filhos muito alvos, e louros, como framengos, sendo seus pais negros como pez. No tempo em que eu andava nestes Reinos de Quiteve, estava ũa criança destas branca na sua corte, que o rei ali tinha, e sustentava, por cousa mui estranha, e prodigiosa. O Monomotapa tinha em sua casa outros dous cafres alvos com a mesma admiração. Dizem os cafres, que estas crianças que nacem brancas de mulheres pretas, são filhos do Diabo, porque ele os gera nestas cafras, estando elas dormindo. D. Jerónimo Coutinho vindo da Índia por capitão-mor das naus do ano do Senhor de 1600, trazia na sua nau ũa cafrinha muito alva, que lhe deu na Índia o Vice-Rei D. Francisco da Gama, Conde da Vidigueira, a qual eu vi em Goa em sua casa, e depois na ilha de Santa Helena, onde estivemos todos, vindo eu na mesma armada. Esta cafrinha filha de dous cafres pretos, era tão alva, que até as pestanas dos olhos tinha brancas, faleceu no mar vindo da Ilha de Santa Helena pera Portugal.

モコランガ王国には，きわめて色白で髪はブロンド，という子を産むカフル女がいる。その父親は瀝青のようにまったくの黒人であるにもかかわらず。私がキテーヴェ〔首長を表わす普通名詞〕の諸国で活動していた頃，その宮廷に，このようなカフル女から生まれた白い膚の子がいた。その王は，この子を稀なもの，途方もないものとして宮廷で所有し，扶養していた。モノモターパ〔首長を表わす普通名詞〕は，同

様の驚くべき属性を有する別の色白のカフル人ふたりを，その宮廷に囲っていた。カフル人は，黒人の母から白い膚で生まれてきた，こうした子らを悪魔の落とし子である，と言う。寝ているさなかのカフル女に精液を注ぎ込み，こうした子を産ませたその張本人，これが悪魔でなくて何か，と。ドン・ジェロニモ・コウティーニョが，1600 年，ナウ船隊のカピタン・モールとして，インドから戻るに際し，彼はみずからのナウ船内に，きわめて膚の白いカフル娘を連れていた。その娘は，ヴィディゲイラ伯にして副王のドン・フランシスコ・ダ・ガマから，ドン・ジェロニモ・コウティーニョがインディアで譲り受けたものだ。この娘に私はゴアの副王邸で，後にはサンタ・エレーナ島で，それぞれ出逢ったことがある。私はその時の船隊に同伴しており，サンタ・エレーナ島で我らは一堂に会したのだ。このカフル娘は，両親ともに，色の黒いカフル人であるのに，彼女自身の肌はまったく白い。なんと睫毛までが白い。彼女は，サンタ・エレーナ島からポルトガルへ向かう船中，海上で死んだ。

Em um rio chamado Inhaguea, que está entre Sofala, e o Rio Luabo, vi ũa negra velha demais de sessenta anos, parida de poucos meses, estar dando de mamar ao filho que pariu sendo daquela idade. Muitas cafras parem dous, e três filhos de um parto; eu vi ũa em Sofala, que pariu três, morreu-lhe um, e criou dous, até serem de perfeita idade.

ソファーラとルアーボ河との間に，イニャゲーアと呼ぶ河がある。この河で私は，齢 60 を超す老女と出逢った。彼女は，数ヵ月前に出産を終えたばかりなのだが，それほどの高齢でありながら，産んだ子に授乳を続けている。多くのカフル女は，1 度の出産で双子や三つ子を生む。私はソファーラで，三つ子を産んだカフル女

に出逢った。ひとりには先立たれたが，他のふたりは，これをりっぱに物心つく年齢まで育てた。

Um cafre cristão vi em Sofala, chamado Pedro, o qual morrendo-lhe a mulher depois de parir ũa filha daí a um mês, ele mesmo tomou a menina, e lhe deu de mamar a seus peitos, com leite que neles teve, e a criou perto de um ano, até que lhe morreu de lombrigas, e não por falta de leite, e depois de a minina falecer se lhe secaram os peitos, e nunca mais teve neles leite. Um dia me mostraram este cafre em Sofala, e contando-me dele o caso extraordinário que tenho dito, o mandei chamar, e preguntei-lhe o modo que tevera pera lhe vir leite aos peitos. Ele me respondeu, que a muita pobreza, e necessiadade em que se vira posto nos matos onde morava com ũa criança sem mãe, chorando, sem ter quem lhe desse de mamar, esta o ensinara, e movera a meter-lhe o seu peito esquerdo na boca, pera desta maneira a fazer calar, chupando nele em seco, e depois lhe dava papa muito rala a beber; e continuando isto dous, ou três dias, no cabo deles lhe acudiu leite ao mesmo peito em que a minina mamava, e pouco e pouco lhe veio crecendo o leite em tanta quantidade, que foi bastante pera criar sua filha perto de um ano, até que morreu, como fica dito.

私はソファーラで，キリシタンに改宗したひとりのカフル人に出逢った。名をペドロという。ペドロは妻に先立たれたのであるが，それは彼女が女の子を産んで 1 ヵ月後のことであった。ペドロはこれを引き取り，みずからの乳房から出る乳で，女児を育てている。彼はこの子を 1 年近く養育したが，回虫病のため死なれてしまっ

た。決して乳が出なくなって死んだわけではない。女の子が死んだ後，ペドロの乳房からは乳が枯れ，乳が出ることはなくなった。ある日，ソファーラで，ペドロとはあのカフル人だよ，と教えられた。さっき述べたとおりの驚くべき事象が，彼には確かに認められる，と皆が言うので，私はこの男を呼んでもらった。乳房から乳が出るようにするためどんなことをするのか，彼に尋ねてみた。次のように彼は答えた。「私は母親のいないこの娘と，森の中で，たいそう貧しく惨めな生活を送っていました。誰も乳を飲ませてくれないから，娘は泣き喚きます。やむなく私は，左の乳房を娘にふくませました。実際のところ，私は，そうして泣き喚く娘を黙らせようとしたにすぎません。娘は私の乳房を懸命に吸いますが，乳など出るはずはない。その後，娘に飲ませてやるものといえば，薄い重湯のようなお粥ばかりでありました。こうして2日過ぎ，3日過ぎ，3日目の終わり頃，娘が吸いついている左の乳房から，なんと乳が出てくるではありませんか。少しずつ，出る乳の量は多くなってきました。一年近く娘を育てるには，充分な量でした。もっとも，上述のとおり，娘はついには死んでしまいましたが」。

Contando eu na Índia este caso, me disseram pessoas de crédito que na fortaleza de Ormuz houve um homem judeu de sinal (dos quais vivem muitos na Índia), o qual também criou um filho a seus peitos por falta da mãe, e mulher sua, que lhe faleceu na dita fortaleza, deixando a criança de pouca idade, e por ser pobre não quis buscar ama pera o filho, porque tinha leite nos peitos mui bastante pera o criar, como criou.

私がインディアでこの出来事を語ったとき，信用に値する人々がこんなことを言

った。すなわち，オルムスの要塞に，ひとり生粋のユダヤ人がいる（ちなみにユダヤ人はインディアに多数暮らしている）。この男も，ひとりの男児をみずからの乳房で育てている。それは男の子の母親が，つまり男からみると妻がいないため，そうしているのだという。彼女は赤子を遺してオルムスの要塞で亡くなったのであるが，男は赤子のため乳母に来てもらうのを望まなかったという。貧しかったせいもあるが，なにより男の子を育てるため（現に育てたのであるが）充分な乳が，自分の乳房から出てくるので，そうする必要がなかったのだ。

Um cafre vi no rio dos Bons Sinais, a que os cafres chamam Quilimane, o qual tinha peitos mui grandes saídos pera fora como peitos de uma mulher que cria, mas este nunca teve leite neles, porque lho preguntei, e me informei disso, dizendo-me que de sua própria natureza tinha os tais peitos, e que já seu avô da parte da mãe tevera os mesmos peitos grandes.

カフル人がキリマーネと呼ぶボンス・シナイス河で，私はひとりのカフル人に出逢った。この男には，子育て中の女の乳房のように，外へ突き出た豊かな乳房がある。ただし彼の乳房からこれまで乳が出たことはない。なぜそう言えるかというと，私自身その件について彼に問いただし，彼の口からそうである，乳は出ない，と知り得たからである。この男が私に語ったところによると，彼の乳房は生まれつきそのようであったという。母方の祖父も，彼と同じように，豊かな乳房を持っていたそうだ。

Gabriel Rebello, feitor e alcaide-mor que foi da fortaleza de Maluco, no livro

que fez das cousas notáveis daquelas ilhas Malucas, dirigido a D. Constantino, Vice-Rei que foi da Índia, diz que um seu compadre, e amigo, morador na mesma fortaleza de Maluco, chamado Francisco Palhã, tinha um grande bode em sua casa, juntamente com outras cabras, o qual tinha uma grande teta cheia de leite, em que lhe mamavam os cabritos, e ele os consentia, e agasalhava, como se fora sua própria mãe.

ガブリエル・レベーロは，かつてマルーコ〔マルク諸島〕の要塞で商館員を務めるとともに大警吏の任にあった男だ。その彼がマルーコ諸島の注目すべき諸事について書きとめた書物――この書物はインド副王であったドン・コンスタンティーノへ献呈された――の中で次のように述べている。いわく，私，ガブリエル・レベーロの代父であり友人であり，かつマルーコの要塞の住人でもあるフランシスコ・パリャンという男が，自宅に大きな牡ヤギを 1 頭飼っている。別に雌ヤギも数頭一緒だ。さてその牡ヤギであるが，とびきり大きな乳首がひとつあり，そこから溢れるように乳が出る。その乳首に群がって子ヤギたちが乳を吸っている。しかも牡ヤギはこれを少しも嫌がらず，まるで産みの親であるかのように，大いに喜んで乳を与えている，と。

Depois que vim da Índia pera Portugal, soube como em Moura, vila nobre de Alentejo, vivia um homem pobre, que ordinariamente ganhava de comer por seu suor, ao qual comummente chamavam Pai velho, e por este nome era mui conhecido naquela terra. Deste homem me afirmaram, que havia muitos anos que tinha leite nos peitos, e ainda hoje sendo de idade de mais de sessenta anos, o tinha

em tanta abundância, como pode ter uma mulher que cria, o que ele também dizem que fez, dando de mamar a duas crianças, filhas de ũa sobrinha, ou parenta, em cuja casa ele estava. Este homem ainda hoje vive, e preguntando eu por ele a pessoas de Moura, pera me inteirar na verdade deste prodígio, me disseram que algũas vezes viram este homem sobre apostas, e porfias que outros faziam, se tinha leite ou não, apertar o peito com a mão, e lançar leite dele que lhe esguichava fora em muita quantidade, e tão grosso, que o provava na unha onde se tinham algũas gotas pegadas, e penduradas na mesma unha, sem caírem. A um religioso da Ordem de S. Domingos, indo ter a esta vila, mostraram este homem, e lhe contaram como ele dera de mamar a duas crianças, e as ajudara a criar, da maneira que fica dito.

インドからポルトガルへ戻った後，私はこんなことを知った。アレンテージョにモウラという美しい村があり，そこにひとりの貧しい男が住んでいる。彼は食うために，日々，額に汗して懸命に稼いでいる。皆は彼を「パイ・ヴェーリョ」――老いたオヤジサン――と呼ぶ。この通称で彼の名は同地に広く知れ渡っている。この男について，人々が確言したところによると，もう何年もの間，彼の乳房から乳が出るという。齢はもう 60 を超えているのに，乳はよく出るそうだ。まるで赤子を育てている婦人のようにたっぷりと。赤子を乳で養うといえば，この男はそれを実際にやっていた，と皆言う。すなわち，姪っ子つまり自分の親戚――その家に彼は居候していたのだが――の娘ふたりへ授乳していたというのだ。この男は，今も存命している。この不思議が本当なのかどうか，とことん知りたくて，私はモウラの人々へ彼のことを問いただした。すると皆は私にこう言った。「私たちは実際に見ましたよ。乳が出

るのか出ないのか，他人から，賭けというか，言い争いの対象にされると，パイ・ヴェーリョは，手で胸を圧迫し，乳を出すのであります。噴き出るように，大量に，とくとくと，乳は出る。爪についた乳を，パイ・ヴェーリョは舐めてみせる。乳は数滴の雫で爪にぺったりとくっつき，垂れ下がって，決して落下しません」と。聖ドミンゴスの修道会〔ドミニコ会〕の一修道僧がこの村へ赴いたとき，彼はパイ・ヴェーリョを紹介された。皆，この男がふたりの子に乳を与え，これを養う手助けをしていた次第を話して聞かせた。

♣

CAPÍTULO XX（PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO）

Da ilha Maroupe, situada no meio do rio de Sofala, e da caça que nela se cria.

第 20 章（第 1 部第 1 巻）　ソファーラの河の中に位置するマロウペ島，およびその島で棲息する獣について

No rio de Sofala, obra de quatro léguas da fortaleza polo rio acima, começa uma ilha chamada Maroupe, que tem oito léguas de comprido, e no mais largo légua e meia, pouco mais ou menos. Um português chamado Rodrigo Lobo, era senhor da mor parte desta ilha, da qual lhe fez mercê o Quiteve por ser mui seu amigo, e juntamente lhe deu título de sua mulher, nome que o Rei chamava ao Capitão de Moçambique, e ao de Sofala, e aos mais portugueses que muito estima,

significando com tal nome que os ama, e quer que todos lhe façam cortesia, como a sua mulher, e realmente assi é, que todos os cafres veneram muito os portugueses que têm título de mulheres de el-Rei. Nesta ilha tinha Rodrigo Lobo muitos cafres seus escravos, e os mais que nela moravam todos eram seus vassalos. Algũas vezes fomos a ela, eu e o padre meu companheiro, a catequizar, e baptizar alguns deles, que pola mor parte eram gentios, outras vezes a folgar, porque é a ilha de muita recreação, por haver nela grandes pescarias, e caça de muitos animais, como são veados, merus, paraparas, nondos, gazelas, vacas bravas, que têm pouca diferença das mansas, muitos porcos do mato, e javalis, e outras muitas castas de feras, que andam em bandos como vacas, ou cabras.

ソファーラの河の真ん中，その砦から4レグア河を上流へ遡ったところから，ひとつの島が始まる。これをマロウペと呼ぶ。この島は長さにして 8 レグア，最も幅のあるところでおよそ〔1〕レグア半ある。ロドリーゴ・ロボと名乗る一ポルトガル人は，この島の大半を所有する領主であった。この島をもってキテーヴェは彼に対する下賜の品としたのだ。それは，彼がキテーヴェの大いなる友人であったからだ。と同時に，キテーヴェは，彼に対し，みずからの〈妻〉という称号を授けた。この呼び名であるが，王であるキテーヴェがモサンビークのカピタン，ソファーラのカピタン，さらには，彼がたいそう重んずるその他のポルトガル人へ与えたものである。こうした呼び名を授けることにより，キテーヴェは，みずからがいかに彼らを愛しているか，さらに，彼らが皆――キテーヴェの〈妻〉として――みずからへ礼を尽くして欲しい，と暗に伝えようとしているのだ。その効果は覿面で，王たる者の〈妻〉という称号を有するポルトガル人に対し，カフル人は皆，崇敬の念を懐く。この島にロドリーゴ・

ロボは，多数のカフル人を奴隷として抱えていた。この島に住む残りの連中も，彼の家来であった。我ら——我らとは，私と，わが同伴者のパードレである——は，ときおりこの島へ出かけた。島の住民——その大半がゼンチョ〔異教徒〕であった——の幾人かへカテキズモ〔教義要綱〕を教え，バウチズモ〔洗礼〕を授けにゆくこともあれば，気晴らしのためということもあった。というのは，この島は，レクリエーションに大いに適したところであるからだ。大いに魚釣りができるし，多くの獣の狩り場もある。獣といえば，たとえばシカ，メルー，パラパラ，ノンド〔モライスの辞書を参照しても「ソファーラに棲息する四足獣」とあるだけで，不詳〕，カゼル，野生のウシである。この野生のウシといっても，飼い馴らされたウシと差異はほとんどない。さらに森に棲む多くの野生のブタ，イノシシ，そのほか幾種もの獣たちだ。彼らは，たとえばウシやヤギの如く，群れをなして闊歩している。

Os moradores desta ilha de três maneiras caçam este animais. A primeira, e mais ordinária, é em covas que fazem polos vales da ilha, onde se recolhem de noite a comer. Estas covas são de altura de um homem, e de três varas de comprido, e vara e meia de largo na boca da cova, e no fundo mui estreitas, de modo que caindo a caça dentro, trocam-se-lhe os pés em baixo, e não podem tornar a saltar fora, e ali fica entalada, e presa, sem se poder bulir, onde os cafres a matam sem perigo, nem trabalho, ou a tiram viva. Estas covas armam com paus atravessados por cima, e cobertos de palha, ou de rama, de modo que não haja sinal de cova.

この島の住民がこれらの獣を狩る方法は，3 つある。第 1 の，そして最も普通の

方法は，穴を掘って狩る，というものだ。彼らはこの穴を島の谷沿いに作る。食べるため，彼らは夜その穴に籠る。これらの穴は，人の背の高さくらいある。長さ 3 ヴァーラ，穴の入口は幅〔1〕ヴァーラ半あるが，底の幅はずいぶん狭まっている。だから，獲物がこの中に入り込むと，下のほうで，両脚を交叉するしかなく，もはや外へ飛び出すことはできない。獲物はそこでがっちり動きを封ぜられ，拘束され，身動きはできない。そこでカフル人は，危険も苦もなく，獲物を殺す。さもなくば，生きたまま，引きずり出す。こうした穴をこしらえるに際して，彼らは上のほうで棒を交差させ，藁もしくは枝で覆い隠す。そうして穴の気配をなくする。

A segunda maneira de caçar é fazendo-lhe cerco da banda da terra com muita gente, e cães que ladrem, e façam fugir a caça para o rio, onde têm postas ao longo da terra muitas embarcações pequenas a que chamam *almadias*, com dous caçadores em cada ũa, um sentado na popa, com um remo na mão prestes pera remar, e outro na proa com azagaias, pera ferir, e matar a caça. Isto preparado no rio, e a gente das embarcações mui agachada, e quieta sem falar, por não ser vista nem sentida da caça, faz a gente da terra ũa meia lua, e a vai cercando, e açulando-lhe os cães, com grande estrondo e grita, e ela fugindo, vai buscar o rio pera o atravessar a nado à outra banda, como costuma; mas tanto que se lança na água, acodem mui depressa as almadias remando, e tomam a caça a meio do rio viva, e ali a prendem, e levam à borda da água, onde a matam sem trabalho algum, nem perigo, e com muita festa. E assi é esta caçada de mais gosto e regozijo que a primeira, porque nela se toma muitas vezes todo um bando destes animais.

狩りを行なう第 2 の方法は，陸の側で，獲物を包囲するというものだ。そのため多くの人数とイヌどもを駆り出す。イヌには吠えさせ，獲物を河へ追い立てる働きをさせる。河には，陸沿いに小さな舟を多数配置しておく。この舟をアルマディアと呼ぶ。1 艘のアルマディアにはふたりの狩人が乗り込む。ひとりは，船尾に腰をおろして手に櫂を持ち，いつでも漕ぎ出せるよう身構える。もうひとりは，船首に陣取りアザガイアを手にする。獲物を傷つけ仕留めるためである。川面の準備はこうして完了する。舟々の連中がしゃがみ，おしゃべりもやめて，静まり返ると――獲物に見られたり気取られたりせぬように――，陸の連中は三日月の陣形に展開し，獲物に対する包囲を徐々に縮めてゆく。そして獲物に向かい，イヌどもを嗾ける。それに伴って大音響と叫喚とが沸き起こる。獲物は逃げ出し，河へ逃げ場を求める。いつもそうしているように，泳いで対岸へ突っ切ろうとするのだ。しかし獲物が水に飛び込むや，アルマディアが大急ぎで漕ぎ寄せる。そして河の真ん中で獲物を生きたまま確保する。そこで獲物を縛りあげ，河べりへ運ぶ。そこで，苦もなく危険もなく，ひたすら楽しげなお祭り騒ぎのうちに，獲物を殺す。実にこの狩りは，第 1 の狩りより，楽しみやら喜びやらが多い。なぜなら，このやり方によるなら，多くの場合，動物の群れを一網打尽にしうるからだ。

A terceira maneira com que se mata todo o género de caça é no tempo das cheias do rio, no qual os mais daqueles campos da ilha se alagam, e a caça toda foge para os altos da ilha, onde fica cercada sem poder fugir pera nenhuma parte. Ali ficam leões, tigres, onças, elefantes, veados, porcos, e todo o mais género de animais silvestres, e feras, juntos ũs com os outros, sem se fazerem mal, como se

estiveram em a arca de Noé; e esta conformidade lhes causa o temor das enchentes das águas que alagam os campos, e afogam muitos deles. Neste tempo se vão os cafres a estes altos, em almadias, e de dentro delas ferem estes animais com frechas, e azagaias, os quais vendo-se feridos, e acossados, se lançam a nadar sobre as águas, e cuidando assi escapar das feridas se metem na morte, porque os caçadores vão logo remando em suas almadias, e seguindo toda a caça que foge, e no meio das águas a prendem, e matam sem resistência, nem perigo algum, e de suas carnes fazem muita chacina, e tassalhos que comem, e vendem todo o ano. Estas caçadas são mui estimadas, e celebradas entre os cafres, assi por serem de muito gosto, e pouco perigo, como por serem de muito proveito.

あらゆる獲物を殺す第 3 の方法，それは河が大増水を起こす時期ならではのものだ。この時期，平原の大半が水に浸かり，獲物は，ことごとく島の高台へ避難する。獲物は水に囲まれ，どこへ逃げることもできない。高台に難を逃れるのは，次のような動物である。ライオン，トラ，ヒョウ，ゾウ，シカ，ブタ，その他あらゆる種の野生動物，そして猛獣。これらの動物が混然一体となり，相互に危害も加えない。まるでノエ〔ノア〕の箱舟に収まった仲間同士のようだ。このようにみごとな調和なり一致なりが保たれているわけは，獣たちに大増水に対する怖れがあるためだ。大増水によって平原は水没し，獣の多くは死んでしまう。大増水の時期，カフル人たちはアルマディアに乗ってこれらの高台へ向かう。アルマディアの中からカフル人は，こうした獣を矢やらアザガイアやらで傷つける。獣は傷つけられ，切羽詰まったと悟ると，水中に飛び込み，泳ぎ出す。こうすれば傷つけられずに済むと思うのであるが，彼らはそうして，死の淵へみずから入ってゆくのだ。というのは，狩人た

ちは，アルマディアですぐさま漕ぎつけ，逃げる獲物すべてを追跡し，河の真ん中で捕まえ，殺すからだ。何の抵抗も受けず，危険もない。殺した獲物の肉をそれぞれ，おびただしいチャシーナ〔ブタ肉などの塩漬けや燻製〕やらタサーリョ〔巨大な肉の塊〕やらにして保存する。そしてそれをまる 1 年にわたり食べ，かつ売る。このような狩りを，カフル人たちは，大きな悦びをもって，賑々しく行なう。彼らからすれば，これこそ危険のほとんど伴わぬ愉しみであるとともに，実益に叶うことでもあるからだ。

Um ano sucedeu que o dono desta ilha, Rodrigo Lobo, fez ũa caçada com muitos cafres seus escravos, e vassalos, moradores na mesma ilha, e entre muito gado que mataram, juntamente foi morto um leão (cousa mui defesa em todo o Reino do Quiteve, senhor, e rei destas terras, como atrás fica dito). Vendo-se pois o senhor da ilha com o leão morto, e que o rei o havia logo de saber (porque os cafres nenhum segredo têm, e são mui inclinados a dar ũa ruim nova), mandou meter o leão em ũa almadia, e cobri-lo de rama, e pôs-lhe em cima vinte panos, e mandou tudo ao Quiteve dizendo que ele, Rodrigo Lobo, sendo mulher d’el-Rei, e andando fazendo a seara pera seu marido, o viera cometer aquele leão alevantado, e descortês pera a mulher de seu rei, pola qual rezão lhe deu com o cabo da enxada na cabeça por honra de seu marido, e que ali lho mandava morto pera que acabasse de tomar vingança dele, e do agravo que fizera a sua mulher. O Quiteve recebeu o presente, e mandou-lhe dizer que fizera muito bem de matar o leão, pois fora descortês a sua mulher. E desta maneira se acabou esta empófia que Rodrigo Lobo

temia pagar polo menos com perder a ilha, e se fora cafre com perder a vida, e todos seus bens pera a coroa, conforme a lei do Quiteve. Mas como Rodrigo Lobo era grande amigo seu, e sabia falar ao modo dos cafres por metáforas, buscou esta invenção pera contentar ao Quiteve, como de feito contentou, e declarou que a lei que tinha posta não se entendesse em Rodrigo Lobo, sua mulher muito amada.

ある年，こんなことが起こった。当マロウペ島の領主であるロドリーゴ・ロボが，多くのカフル人を率いて狩りを催した。このカフル人は，ロドリーゴ・ロボの奴隷であり家来であり，マロウペ島の住人である。さて。彼らが仕留めた多くの獣の中に，ライオンが 1 頭紛れ込んでいた。ライオンを殺すことは，これらもろもろの土地の主人であり王であるキテーヴェの国全土において，厳禁されている。これは前に述べたとおりだ。ロドリーゴ・ロボは，このライオンが死んでいるのを見，かつ王であるキテーヴェがいずれこの事件を知るに至るであろう，と考えた。というのは，カフル人というのは，およそ秘密を守れぬ連中であり，悪い噂なら，人へ伝えずにはいられぬ性格を有するからだ。そこでロドリーゴ・ロボは，仕留めてしまったライオンを 1 艘のアルマディアに押し込むよう，そのライオンを枝で覆い隠すよう，命じた。彼はその死骸の上から 20 枚の布をかぶせ，いっさいをキテーヴェへ送った。それに際し，こんな口上を添えた。私，ロドリーゴ・ロボは王様〔キテーヴェ〕の〈妻〉であり，王様のため，日々田畑作りに精出す者であります。このたび私，ライオンを殺しました。それは，私という王様の〈妻〉にライオンが逆らい，かつ無礼にも，私に攻撃を仕掛けて参ったからであります。私はそれゆえ，わが〈夫〉の名誉を守るため，奴の頭に鍬で強烈な一撃を食らわせ，即座にライオンへ死を申しつけました。わが〈夫〉の仇を討ち，かつ，王様の〈妻〉に危害を加えようとしたライオンへ復讐を遂げるため

であります。キテーヴェは，この贈りものを受納した。そしてロドリーゴ・ロボに対し，こんな伝言を送った。ライオンを仕留めた汝の手並み，まことに目覚ましい。なにしろ奴は，わが〈妻〉に対し，無礼を働いたのであるからな，と。こうしてこの言葉遊びには，終止符が打たれた。実際のところ，ロドリーゴ・ロボとしては，みずからの島を失う，という代償くらいは，最小限，払わねばならぬか，と恐れていたのだ。ロドリーゴ・ロボがポルトガル人ではなく，もしカフル人であったならば，キテーヴェの掟にのっとり，命を失い，その財産はすべて王室のもとに没収，という代償を払わされていたであろう。しかしロドリーゴ・ロボはキテーヴェの大いなる友人であったし，何より，比喩的な表現を駆使して，カフル人の流儀で会話する術に長けていた。彼はキテーヴェを満悦させるため，そうした特技を駆使したのであり，事実，キテーヴェを満悦させた。そうして高らかにこう宣言した。キテーヴェが課している掟であるが，あれは，私——ロドリーゴ・ロボ——には及ばぬ。なにしろ私は，キテーヴェの寵愛深き〈妻〉なのだからな，と。

♣

CAPÍTULO XXI（PRIMEIRA PARTE, LIVRO PRIMEIRO）

Dos leões, tigres, e onças que há nesta ilha, e de alguns casos que nela sucederam.

第21章（第1部第1巻）　この〔マロウペ〕島にいるライオン，トラ，およびヒョウについて。その島で生じた幾つかの出来事について

No meio da ilha de Maroupe, de que atrás falei, meia légua das casas em que mora o senhor da ilha com toda sua gente, está um bosque muito fermoso, mais de ũa légua em roda, de arvoredo silvestre, tão alto que se vai às nuvens, e tão basto, e copado por cima que não dá lugar ao sol pera entrar nele, polo que em algũas partes é escuro, e medonho. Aqui dentro é casa, e morada de leões, tigres, onças, elefantes, e porcos-monteses. Um dia fomos dentro a este bosque, eu, e o padre meu companheiro, pera vermos ũa caçada de porcos, que o dono da ilha quis fazer por respeito de nos recrear, e fazer mimo, pera o que mandou ajuntar mais de cinquenta escravos, e vassalos seus caçadores, assi pera segurança de nossas pessoas, como pera o efeito da caça, os quais iam todos armados de arcos, frechas, e azagaias, e algũas espingardas, e desta maneira atravessámos o bosque, em que achámos muitos porcos, e deles foram mortos três, e tomados alguns leitões pequenos. Também encontrámos elefantes, e tigres, e alguns búfaros, que todos se desviaram de nós, e fugiram, com que muito folgámos.

すでに話題に上ったマロウペ島の中ほど，島の領主がその郎党すべてと一緒に住む屋敷から半レグア離れたところに，たいそう美しい密林がある。密林は周囲1 レグアを超え，野生の樹木が生い茂っている。その木々はたいそう高く，雲にまで達するほどであり，さらに，きわめて稠密で，てっぺんさえ鬱蒼と葉で覆われているため，太陽の光は足もとまで届かない。だから，場所によっては，密林は暗く，怖ろしげな雰囲気が漂っている。この密林の中こそ，ライオンやトラ，また，ヒョウやゾウやイノシシの家であり，棲み処である。ある日のこと。我ら――我らとは，私と，

私の同伴者であるパードレだ――はこの密林に分け入った。その狙いはイノシシ猟を見物するためであった。この猟であるが，島の持ち主――ロドリーゴ・ロボ――が，私どもの娯楽や慰みのため，また，私たちを喜ばせるため，催したのだ。この催しのため，彼は，50人以上――狩りを行なうみずからの奴隷や家来――を集めるよう命じた。それはひとつに，我らの身の安全を図るためであり，いまひとつに，狩りの効果を上げるためであった。奴隷や家来は皆，弓矢とアザガイア，それから少数のエスピンガルダ銃で武装を固めていた。こうして我らはジャングルを突っ切ったが，そのジャングルの中で，多くのイノシシに出くわした。それらのイノシシのうち3頭を殺し，数匹の子ブタを捕らえた。我らはまた，ゾウやトラ，それから数頭のスイギュウにも出遭った。これらの獣は皆，我らから遠ざかり，逃げてしまったが，我らは大いに楽しんだ。

Em ũa cova fomos dar com um cachorro, filho de tigre, de idade de um mês pouco mais ou menos, o qual trouxemos connosco pera casa, e logo na noite seguinte veio a mãe polo faro até às portas da casa onde estava o filho, bramindo tão raivosa que parecia querer nos comer, e matar a todos, e desta maneira continuou quatro noites, até que o filho morreu, por falta dos cafres que o não quiseram criar, polo ódio que têm a estas feras, e depois de morto foi lançado no campo pera aquela parte do bosque donde a mãe vinha em busca dele, e ao outro dia não foi achado, do que presumimos que a mãe o achou, e o levou ou comeu, porque dali por diante não tornou mais a bramir, nem rodear a casa de noite, como dantes fazia com muita ferocidade.

ある洞穴で，我らは動物の子に出逢った。これはトラの子で，齢はおよそ 1 ヵ月そこそこだ。我らはこの子を家に持ち帰った。たちまちその夜，母トラがやってきた。本能的な嗅覚によって，子のいる家の戸口までやってきたのだ。母トラは怒り狂ったような唸り声を上げ，我らすべてを食ってしまうか，我らを皆殺しにしようとしているかのようさえ思われた。この状態は，4 夜，継続した。やがて子は死んだ。トラの子を育てたいと思うカフル人がいなかったのだ。彼らがこれらの猛獣に懐く嫌悪感のなせるわざであった。子は死んだ後，野原に横たえ，母トラが子を捜しに出てくる密林のほうへ体を向けてやった。子の姿は翌日消えていた。そこから我らはこう推測した。母は子を見つけ，これを連れ去ったか，あるいは，これを喰ってしまったのではないか，と。なぜなら，それ以降，母トラはもう吠え声をあげたり，夜分，家の周囲を徘徊したりは（以前はただならぬ獰猛さでやっていたことなのだが）しなくなったからだ。

Estando nós um dia à tarde assentados nesta ilha à porta da casa com o senhor dela, veio a nós um cafre seu escravo, e disse, se queríamos ver seis leões que tinham àquela hora passado o rio da terra firme pera a ilha, que nos levantássemos, porque eles vinham atravessando o vale que estava junto das casas. Eu, e o padre meu companheiro quasi que estivemos em dúvida de os ir ver ao campo, mas o senhor da ilha, e o caçador nos asseguraram, dizendo que os leões, e os tigres daquela ilha não cometiam gente algũa, nem lhe faziam mal, salvo se acaso encontravam com ela, ou se os assanhavam, e a causa disto era porque lhes sobejava a caça, de que andavam enfarados, por haver na ilha infinita. Então nos

levantámos, e os fomos ver de um alto que estava junto da casa, mas não lhes vimos mais que meios corpos, e as cabeças levantadas, por causa da muita erva que no vale havia, e assi foram passando pera a parte do bosque, tão seguros, e confiados como senhores do campo, e das armas.

ある日の午後，我らがこの島に落ち着いて，この島の領主――ロドリーゴ・ロボ――と一緒にその家の戸口のところで一息入れていると，我らのもとにカフル人がやってきた。ロドリーゴ・ロボの奴隷である。彼はこう言った。6 頭のライオンが，今しがた，陸からこちらの島へ向け，河を渉り終えました。もし皆さん方，ライオンを見たいと思うなら，ただちにここを発ちましょう，なぜなら，ライオンどもは，わが宿舎沿いを走る谷を少しずつ横切っています，と。私と，わが同伴者のパードレが，野原へライオンを見にゆくことに少々ためらいを見せていると，島の領主と，カフル人の狩人は，我らに保証して次のように言うのだ。この島のライオンもトラも，決して人を襲いません。危害も加えません。ただし偶然，これとばったり遭遇したとか，彼らにちょっかいを出したとかすれば，話は別であります。人を襲わぬ理由は，彼らに獲物が充分あるからです。奴らはたっぷりの獲物に満足しているのであります。まったくこの島は獲物に事欠きません，と。それを聞いたうえで，我らは出発した。そして彼らを見にゆくことにした。その地点は宿舎に隣接する高台だ。しかし我らは，ライオンを見るには見たが，見たのは半身だけ，あるいは擡げた頭だけであった。谷には多くの草があるからだ。そうこうしていると，ライオンどもは密林へ歩んでいった。たいそうゆったりと，まるで平原のあるじは俺たちであり，いかなる武器も俺たちには叶わぬ，とでも言いたげに。

Aquela mesma noite, já pola madrugada, ouvimos grandes latidos de tigre, e roncos de leão, mui perto das casas em que dormíamos; e o caso foi que um leão veio seguindo um meru, até que o apanhou junto das nossas casas, e estando comendo nele, acudiram três ou quatro tigres, e rodearam o leão pera lhe apanhar a presa, e isto dizem os cafres que fazem os tigres ordinariamente, andando polo rasto do leão, quando mata a caça, pera comerem os sobejos que lhe ficam depois que se farta; de maneira que assi o faziam estes aqui. Mas o leão, como não estava ainda farto, roncava-lhes como cão que está comendo muito sôfrego, tendo outros diante que lhe querem tomar o que come; e de quando em quando fazia que remetia aos tigres, de que eles fugiam algum tanto, mas logo tornavam a perseguir o leão com latidos pera que largasse a caça, mas contudo nenhum deles ousava chegar a pegar nela. Estando eles nesta contenda, chamou-nos o senhor da ilha, dizendo que fôssemos ver a briga das feras, que era muito pera ver; o que nos logo fizemos, e estando vendo, e esperando o fim dela, mandou o senhor da ilha a dous escravos seus caçadores, que presentes estavam, que fossem tomar a presa ao leão, os quais foram dando grandes brados, e apupos pera que se fossem as feras, e deixassem a caça; o que os tigres logo fizeram, tanto que viram a determinação dos caçadores, mas o leão nunca se quis bulir, nem teve dever com os caçadores, antes se deixou estar bem devagar comendo, e roncando aos caçadores que se chegavam, os quais tornaram a voltar, e disseram ao senhor que o leão não estava ainda farto, porque enquanto o não está, tendo a caça morta diante de si, não a larga ainda que o matem, porque é mui sôfrego, e carniceiro. Mas depois que se

fartou, ele mesmo se levantou, e se foi passeando mui devagar, e tão seguro como quem não temia cousa viva, e depois que desapareceu, foram os cafres, e trouxeram o meru quasi todo, porque o leão lhe não tinha comido mais que o pescoço, e muita parte dos peitos, e alguns bocados das ancas, e o leão não tornou ali mais, nem os tigres.

その夜のことである。夜がそろそろ明けようかという頃であった。我らはトラどもの大きな吠え声を聞いた。ライオンの唸り声も聞こえた。我らが眠っていた家々のすぐそばである。事件が起こった。それはこうだ。1 頭のライオンが 1 匹のメルー〔シカの一種〕を追いかけてきた。そしてついに，我らの宿舎のそばでこれを捕まえた。そうしてライオンがこのメルーに喰らいついているところに，3〜4 頭のトラ〔実際はハイエナであろう〕が駆けつけてきた。彼らはそのライオンを取り囲み，ライオンから獲物を横取りしようとしていた。カフル人が言うところによると，これはトラどもが日常的にやっていることだそうだ。彼らはライオンの跡をつけ，ライオンが獲物を仕留めるのを待つ。そうしてライオンがたらふく食った後の残飯を食う。これらのトラどもがここでやろうとしていることこそ，それであった。しかしライオンは〔メルー1 匹喰っても〕まだまだ満足していなかったので，トラどもに対し，威嚇するような唸り声を上げた。まるでがつがつ餌に喰らいつくイヌのようであった。ライオンの前に，別のトラたちがいた。奴らも，ライオンの食うものを横取りしようとしているのだ。ときとして起こることだが，ライオンはこうしたトラどもに攻撃を仕掛ける。そのためトラどもは，ある程度，逃げ散る。しかし，ただちにライオンへ逆襲を仕掛ける。獲物を放すよう大きな唸り声を上げながら。しかし，どのトラも，敢えてライオンの捕らえた獲物にかぶりついてくる勇気はない。獲物の取り合いに彼らが励んでいるとき，島の領主

――ロドリーゴ・ロボ――は我らを呼んだ。猛獣どもの喧嘩を見にゆこうではありませんか，見ものですぞ，と我らに言うのだ。我らはただちにこれを実行に移した。それを見物しているところに，そして，その戦いの結末や如何に，と待ち構えていると，ロドリーゴ・ロボは，そこに居合わせたみずからの狩人である奴隷ふたりに言いつけ，ライオンから獲物を取り上げてくるよう命じた。ふたりの奴隷は，叫喚と奇声を上げつつ猛獣どもへ向かっていった。猛獣どもが，その場を去り，獲物を諦めるよう仕向けるためだ。トラどもは，すぐそのようにした。狩人たちの重大な決意を見て，そうしたのだ。しかしライオンは，そうはしなかった。いっかなその場を動こうとしないのだ。猟師たちに怯む気配も見せなかった。それどころか，ライオンはそのまま悠然と獲物を喰らい，近づいてくる猟師に向かって唸り声を上げるばかりであった。狩人たちはいったん戻ることにした。そして主人に向かって言うには，ライオンはまだ満腹していません，満腹せぬ限り，死んだ獲物を目前にして，たとえ殺されても獲物を放しません，奴ときたら，どこまでもがつがつして，血に餓えています，と。しかし，ライオンは満足したのか，ようやく立ち上がり，きわめてゆったりとした足取りで歩き出した。その悠然たるありさま，おのれ以外の生きものに恐れなど懐いていないかの如くだ。ライオンが姿を消した後，カフル人は再度出直し，ほとんど全身そのままの獲物――メルー――を持ち帰った。ライオンときたら，頸と，胸の大部分と，尻とを幾分齧っただけで，その他は喰らわずじまいなのだ。ライオンは，もうそこには戻ってこなかった。トラどもも，戻ってこなかった。

Estes tigres têm mui grande faro de cousa morta, porque muitas vezes vinham ao adro da igreja do Espírito Santo de Sofala a desenterrar os defuntos que

estavam enterrados de fresco, e os comiam, como eu vi por três vezes, pola qual rezão mandava sempre fazer as covas muito fundas. Ũa manhã se achou neste mesmo adro um tigre morto em cima de ũa cova, com as unhas metidas na terra, começando de cavar, e abrir a cova. Este era tão velho que já tinha os dentes todos quebrados, e podres, e estava tão magro que não tinha mais que a pele, e o osso, e muita parte do corpo pelado, ou gafo; tinha mais de vinte sinais de feridas velhas, e algũas de palmo, que deviam ser d'outros tigres com quem tinha pelejado, o que eles ordinariamente fazem sobre o comer, de modo que este veio aqui morrer, ou de velho, ou de fome, ou de tudo junto.

これらのトラは，死んだものに対し異常に鋭い嗅覚を有する。何度もあったことだが，トラどもはソファーラのエスピリト・サント教会の敷地にやってきては，そこに埋葬されてあまり時を経ない死骸を掘り起こし，これを喰った。これは私自身，3度にわたり，実見したことだ。私はだから，つねづね墓穴は極力深く掘るよう命じていた。ある朝，これと同じ敷地の中でトラが 1 頭死んでいた。ある墓の上である。トラは土を掘り，墓に穴を開けようとしているところだったのか，土の中に爪を食い込ませていた。このトラは老齢で，もはや歯はすべて破損し腐っており，体はやせ衰え，文字どおり骨と皮であった。体の大部分は，皮がめくれ上がり疥癬に罹っていた。20を超える古傷の痕があった。古傷は掌尺〔約22センチメートル〕に達するのもある。これらは定めし，戦いの相手であった他のトラどもから負わされたものに違いない。彼らは食うことをめぐり，このような戦いに明け暮れている。だから戦いに敗れたこのトラは，老齢のせいか餓えのせいか，はたまた，もろもろの要因が複合したせいか，死を遂げるため，ここにやってきたのだ。